

トランスアクションの概念

—— デューイとベントリーの共同研究 ——

上
林
良
一

目次

- 一 はしがき
- 二 インターアクションとトランスアクション
- 三 デューイとベントリーの共同研究
- 四 『哲学的文通』
- 五 共同研究の背景

一 は し が き

広い意味での行動科学者であったA・F・ペントリーの著書『数学の言語学的分析』(Linguistic Analysis of Mathematics, 1932)とそれにつづく著書『行動・知識・事実』(Behavior, Knowledge, Fact, 1935)の両者は、知識に関する言語学的分析学の上で大きい成果であった。この二冊の著書は、研究史上に大きい価値をもっていたばかりではなく、これらの著書の刊行が機縁となつて、もはやその頃老年に達していたデューイとペントリーの二人が、新しく共同研究の道程にはいることとなつたのである。その細かい経過について云えば、最初『数学の言語学的分析』を贈つたときのペントリーからデューイへの、一九三二年十一月十五日付の手紙、これに対してデューイからの一九三五年五月二二日付の返書があり、すぐにこれに応じてペントリーからの、『行動・知識・事実』について述べた一九三五年五月二八日付の手紙を読めば、ペントリーが、これら二冊の著書をデューイに贈つて批判をもとめ、本質的な討論を内容とした書信の往来がはじめられたことが、理解されよう。そして、それは同時に、一九五〇年までの手紙の交換がしめすように、ながい二人の共同研究の始まりでもあつたのである。

こうしたデューイとペントリーの努力は、論理学のなかで伝統的に使用されてきた言葉、術語の研究と、これらの分野でみられる言語学的な混乱を明確にしよつとすることを意図によつて、いわば知識の理論化をめざす作業であつた。デューイとペントリーの多くの論文は、一九四五年から一九四八年の間の哲学雑誌(The Journal of Philosophy)に掲載されて、大きい衝激をあたえたのであるが、一九四九年の『知ること知られるもの』(Knowing and the known)は、これら共同研究の集大成されたものであつた。これは、一九四四年、デューイとペントリーにより「確

実な名称の探求」(A Search for Firm Names)との共同宣言がなされ、これを序論としてその後公表された十一篇の論文と最後の十二章に「研究行程の概要」(Summary of Progress Made)をくわえて一巻にまとめられたものである。冒頭に「永らくの懸案であった仕事を企てるべき時が到来したと、一年程前に、われわれは決心した。その仕事とは、知識論とよばれる専門研究分野での知ること」(knowings)と「存在すること」(existing)の研究において、確実に用いることのできる一組の主要な術語を確定しようとする試みのことである⁽¹⁾。「知ることと知られるもの」との交渉の過程をあきらかにし、頼みとするに足る明確な名称を確保し、それに依らざるを得ないトランスアクション・アプローチの展開をめざしているかぎり、共同研究の集大成である『知るものと知られるもの』の内容から、われわれは、ベントリーとデューイの基本的な態度や考え方、そしてトランスアクション・アプローチとトランスアクションの概念をあきらかにしなければならない⁽²⁾。

(1) J. Dewey and A. F. Bentley, *Knowing and the Known*, 1949, Introduction, P. vi.

(2) 「transaction」の訳語について、交互作用、あるいは、とり引きと訳られることがある。ジャコビは「interaction」(相互作用)と対比して、その特徴をあきらかにするために、「トランスアクション」の表現を使用することとする。

二 インターアクションとトランスアクション

「われわれの信念、知ることについての知識の将来の進歩は、コミュニケーションへの信頼を要求するという一は、トランスアクションな立場と枠組に統合的に結びつけられている。トランスアクションな見地を強調する考え方は、われわれの研究が進むにしたがって、だんだんと成長してきた。インターアクションな見地、セルフアクション

ナルな見地から、トランスアクションナルな立場を区別することが体系的になされるとき、われわれの発展の主旨は、もっとも容易に把握されるものと信じる。トランスアクションナルな見地というのは、事実において、知るということは、共働的な、そしてコミュニケーションと統合されるべきものであるという根拠にしたがって、体系的にすめられるべき立場なのである。」と述べているのは、『知ることと知られるもの』の序文で示されている基本的態度である。

「われわれ自身のやり方というのは、トランスアクションナルな方法であって、従来は、普通に考えれば相いれないばらばらで断片的なものから成り立っているように語られてきた多くのことを、空間的にも (extensionally) 時間的にも (durationaly) 一つのものとして考察することが正しいとされるのである。われわれは、かならずしも、この方法が他の方法よりも、とくに現実的で一般的であると思つて示しているわけではないが、われわれがかかわっている分野では、今必要とされている一つの方法であるとして提示している。物理学者達が、粒子と波動の表象の両方を、必然的に、使用しているのとおなじような考え方で、われわれは、インターアクションナルな観察とトランスアクションナルな観察とをここでは使用する。重要で特殊な研究は、有機体を中心課題であるこの分野にふさわしい。混乱した、あるいはセルフアクション的 (自己運動的) 意味をもたないで、精細に考えられているかぎり、トランスアクションナルな環境においては、このことは、すべての探究の形式に、つねに妥当することであろう。こうした命名法の領域における資格保持者として、われわれは、あらかじめ、行動者 (behavior-agent) と行動対象 (behavior-object) を設定する。それらは、広いトランスアクションナルな表象の内部において、それぞれインターアクションナルな取りあつかい方法をあらわす。一方では不確定的に名づけられた有機体、人間、アクターがあり、他方では、さまざま

まな形で名づけられた環境がある」と述べているのも、ハントリーとデューイのトランスアクションナル・アプローチと「知ることと知られるもの」についての基本的立場をあまりかにしている。いうまでもなく、第二章「術語の問題」(the Terminological Problem)が、もともとハントリーとデューイの二人の署名のもとに作製された論文であることを考えると、ここにあまりかにされた基本的態度は、二人の一致した見解であった。⁽²⁾

デューイとハントリーは、『知ることと知られるもの』のなかで、まづ論理学と知識論の現状をあらわしている「言語学上の混乱状態」(linguistic chaos)を指摘し、「術語」(term)、「定義」(definition)、「信号」(signal)、「表象」(presentation)、「実在」(reality)、「提案」(preposition)等の重要な言葉の使い方について、こうした分野における著書と論文を採擷して調査した。これについて、参考にした主要な著者は、カルナップ (R. Carnap, Introduction to Semantics, 1942)、『ノーモン・ネゲル (M. R. Cohen and E. Negel, An Introduction to Logic and Scientific Method, 1934)』、『キョーカス (C. J. Ducasse, 'Is a Fact a true proposition?—A Reply', Journal of Philosophy 39, 1942)』、『ルイス (C. I. Lewis, The Modes of Meaning, philosophy and phenomenological Research, December 1943)』、『キンス (C. W. Morris, Foundations of the Theory of Signs, 1938)』、『ソートタルスキー (A. Tarski, 'The Semantic Conception of Truth and the Foundations of Semantics', philosophy and phenomenological Research, March, 1944) 等⁽³⁾である。⁽⁴⁾

このようにして、デューイとハントリーは、この領域でのそれぞれの著書、論文の内容において、それらの言葉、術語はいろいろな意味あいで使用されているので、言葉、術語のあいだの微妙な意味や立場の相違があらわれて、実際のには言葉を明確に区分することが不可能であることが分った。したがって、彼等は、観察にもとづく確定的な名

称がもめられていることを痛感し、論理学や知識論の学者たちに理解され、一般的にうけいれられるように、それらの名称をはっきりさせるべきであると考えることになった。

その結果、デューイとベンツリーは、それらの名称を確定的なものとし、その名称に確実な根拠をあたえるものとして、「詳細に述べること」(specification)と「トランスアクション」(transaction)を強調したのである。第十二章で彼等は、トランスアクションと「詳細に述べること」について、とくに、両者が互に関係し協力しあうことについて、つぎのように述べて、くりかえし説明している。すなわち、「われわれのテーマを通観して、一度強調しておこう。〈詳しく述べること〉と〈トランスアクション〉とは、一方は知ることに関し、他方は知られるものの側に関係ふかいたのであるが、両者はともに機能するものである。かつては、古い文字どおりの考え方にしたがって否定され、圧迫されていたのであるが、この二つはより一層共同してはたらくことであろう。それらは同時にゆたかな空間的、時間的な位置づけを可能にしており、具体的で特殊な事例への関係を可能にするものである。⁽⁵⁾」

さて、以上述べてきたような基礎的観点にしたがって、トランスアクション (transaction) の概念はセルフアクション、自己運動 (self-action) やインターアクション (interaction) とは異なり、有機体と環境の両者が互いに規定しあう概念であるところに特色がある。有機体と環境の関係のように、両者の作用を通じてでなければ、有機体でも環境でもありえないような相互作用的な関連を成立たしめている作用である。インターアクションの方は、相互作用の語で示されているように、AからBに、あるいはBからAに、あらかじめ互に独立した物のあいだに、互に相手に対して影響をあたえあうはたらきのことである。先にもふれたように、『知ることと知られるもの』の第二章「用語上の問題」(The Terminological Problem)のなかで、事実 (Fact)、結果 (Event) 名称づけ (designation)、『詳

細に述べること」(specification) 等二項目にわたって実験的定義をあげている。トランスアクションについては、「ある段階では、探求のために積極的に必要とされ、他の段階では、維持され、しばしば古い言語による名称の注入を崩壊させることを要求するような全体系の機能的観察」と定義されている。インタークションは、「互に働らくものとして、組織された部分や他の物を観念すること」と定義されている。この場合、相互作用つまりインタークションから明確に峻別されるトランスアクションの観念が重要なのであるから、直接的には大きい意味を持たないとしても、一応は、セルフアクションの定義をあげてみると、「活動するものとして理解される、段段的に独立した行動者(actor)、魂(soul)、心(mind)、自己(selves)、力(power)、勢力(forces)の語のような前科学的な観念」と規定されている。

したがって、トランスアクションは、すべての体系の機能的観察であることを強調しているので、人間の個々の行為のそれぞれに注目するのではなく、人間の行動もしくは経験的全体を、相関的に、機能主義的なものとして考察することである。これに対して、インタークション、相互作用とは、「組織された部分や他の事物の相互の影響」を重視するのであるから、部分的で、かつ独立した物の間の平面的な相互依存の行為を主張するのであり、相関よりも個々の部分の活動を重視する考え方が働らいている。

最後に、デュレイとベントリーが、第十一章「試験的名称群」(A trial group of names)のなかで、約百項目の術語とともに、トランスアクションの概念を、つぎのように確定的に述べていることに、われわれは注意しなければならない。すなわち、「知ることと知られるものは、古い議論によれば、インタークション、相互作用において観察されるように、分離されたものとして理解されてきたのであるが、今では、一つのプロセスとして理解される。知ら

れるものと名づけられたものは、共通した過程の局面と解される。そうでなければ、それらは、分離された構成体とみなされ、独立したさまざまな程度に応じて、インターアクションの形式で考察される」⁽⁹⁾。

以上のように、知ることと知られるものを中心に、知識論、論理学、認識論の領域において、トランスアクションナルなアプローチとトランスアクションの概念が重視、強調されているところから、デューイとベントリの考え方は、従来の、インターアクション、相互作用の機能や役割の減少、もしくは消失につながる価値評価の方向を推察することができよう。ここでこうした連関のうえで、参考上、インターアクションの項目にふれてみることにしよう。すなわち、「この言葉は、インターという接頭語のために、現在では、疑いもなく、非常に議論することに困難がつきまとう原因となっている。探求の細目にわたって、適正なそして不正な用法については、第四章と第五章で論じてきた。トランスアクションナルな論じ方とインターアクションナルな考え方については、明快に区別されるようになる」と一そう容易に進歩がはかられることであろう。要するに、知ることと知られることについての一般理論としてのインターアクションナルなアプローチは、今日のわれわれの方法のもとでは、まったく峻拒されるべきことである」⁽¹⁰⁾。このことから、われわれは、知ることと知られるものの関連については、インターアクションの役割は、すっかりトランスアクションの概念によって、とって代られるべきであると説かれていることを理解することができよう。

なお、以上に述べた点をあきらかにするためにも、先述したように、もともと、self-action（自己運動）は前科学的な観点に立つものであると定義されていたので、いわばこの場合考察の範囲外にあると考えられるが、第十一章「試験的名称群」の一つの項目として、どのような取扱われているかを見てみよう。すなわち、「インターアクションナルな、そしてトランスアクションナルな論じ方への歴史的発展にさきんじて、知られるものの原初的な取扱い方を述

べるために使用される言葉であり、ごく稀には、今日、探求についての哲学的、論理的、認識論的、限定された心理学的領域以外で見出される⁽¹⁾。以上の説明から、selfaction は知識論、知ることと知られるものの関連では、まったく問題外のものとして取扱われていることがわかり、このように、セルフアクションやインターアクションの価値よりも、トランスアクションの機能の持つ役割と、トランスアクション・アプローチの立場を強調し、重視していることこそ、デューイとベントリーの一致した見解であることを理解することができよう。

以上みて来たように、トランスアクションの機能と概念をインターアクションのそれと比較して確認することができた。さて、第十一章「名称の試論的グループ」では、百項目におよぶ術語のグループを語源的な観点からの定義づけを試みている。ここではインターアクションの概念とトランスアクションの意味を語源的な意義づけからあきらかにする一助として、インター(inter)あるいはトランス(trans)の定義づけをしらべてみよう。すなわち、インターアクションという術語の場合、「inter-」についてつぎのように述べている。「この接頭語には二組の使用法がある(オックスフォード辞典を見よ)。その一つは〈一の間〉(between)′、〈一の中間〉(in between) あるいは〈一の部分の間〉(between the part of) という意味をしめす。他の使用法は、〈相互〉(mutuality) とか〈交互〉(reciprocally) の意味をしめす。いかに不注意からといえども、哲学、論理学、心理学の分野では、こういうような変化しやすい使用法というものは、あいまいさをのこし、信頼しがたいものである。この誤った習慣は、二つの意味づけをはっきりさせないで混合して確定してしまっている。ここでは、〈inter〉という接頭語を、〈一の間に〉(between)′、〈一の中間に〉(inbetween) の意味が優勢であるような場合に限定して使用し、〈trans〉という接頭語は、〈相互〉(mutually) や 〈交互〉(reciprocally) の意味が意図される場合に使用することによって、曖昧さ

を排除することが提案されている⁽¹²⁾。

つぎにトランスアクションの接頭語である「trans-」という言葉について、以下のように定義づけている。すなわち「この接頭語は、古い使い方では、〈―を超えて〉(beyond) という意味をも持っていたが、ごく最近の発展では、〈横切って〉(across)、〈一方の側から他の側へ〉(from side to side) 等をあらわす。現在では、〈trans〉の語と〈inter〉の語の間に、明瞭な相違があるという根本的な重要性が強調されるべきである⁽¹³⁾。と述べている。それゆえ、こうした定義から、デュースとベントリーは、(trans-)の語につづいて「相互に」(mutually)、「交互に」(reciprocally)の意味と、「横切って」(across)、「一方の側から他方の側へ」(from side to side) という意味との両方を総合して意義づけをし、解釈しているとみることができよう。したがって、トランスアクション・アプローチからみると、知ることと知られるものは、一つの共通した過程の二つの局面として観察され、知るものと知られるものが互いに主体と客体ではなく、両者の間に、相互に横切って相関する一つの過程であるとして解釈される。この場合、さきに(trans-)の意味としてあげた古い用法としての「超えて」(beyond) という意味づけは、完全に消失、もしくは減少されていると考えてよいだろう。そのことは、つぎに、第四章「インターアクションとトランスアクション」で、デュースとベントリーがしめたトランスアクションの定義によってあきらかである。すなわち、「叙述(description)と名称づけ(naming)のシステムは、行為の局面や相を論じるために使用される」とし、「要素」(elements)や他の仮定的に分離した、あるいは独立の〈実質〉や〈本質〉や〈実体〉に最終的に帰属することもなく、こうした分離した〈要素〉から仮定的に分離した〈関係〉(relations)を切り離して考えるわけでもない⁽¹⁴⁾と説明している。ここから、われわれは、いわゆる主体、客体、実質、あるいは関係等にとらわれず、一つの共通した過程の側面として、

知るものと知られるものを考察するという、機能的立場を強調するトランスアクションの特徴を理解することができ
る。いいかえれば、状況に関するすべての部分が、積極的な参加者として機能するという考え方に通じるものであ
ろ。したがって、ここには、語源的な意味で、(trans) のもっている「—を超えて」(beyond) の意味は取りあげて
いないのである。

ちなみに、以上に述べたように、ここで主張されているトランスアクションの特徴は、知ることと知られるものを
一つの過程としてとりあげ、「相関関係」つまり「関係」を強調するものでないのであるから、この点われわれは、
ベントリーの基本的考え方である「相対主義」的思考が延長され、拡大されていることに考え及ぶ必要がある。し
たがって、これをあきらかにするために、ドイツ社会学のなかで、関係学的主張を強く打ち出したウィーゼ (U.
Weise) とベントリーの論争と両者の基本的相違を想起してみよう。もともと、ウィーゼ社会学の方法論は、ドイツ
社会学としては珍らしく自然科学的な性質がよく、ドイツ社会学のなかでは、ジンメルとはことなり、むしろアメ
リカの E・A・ロスの方法と似ているといわれ、ウィーゼ自身もロスの方法との類縁を發表し、この意味で、アメ
リカ社会学と共通した特色があったといわれる。したがって、このこともあって、心理主義的社会観、社会的事実によ
る心理的基礎をあきらかにしようとする心理的方法も誤りであるとする立場も、包括的に、ベントリーの社会観に
近いものがあつたと解されよう。したがって、「緊密に編まれた一つの関係網を組みたてることを、社会学の本来の
課題である」とみるものは、こうした社会的相対理論 (Soziale Relativitätslehre) を多くの点で正しいと判断しなけれ
ばならない。単純な因果性は単なる目的論とおなじように、社会学の分析には不十分であるから、ベントリーの見解
に一致する⁽¹⁵⁾と述べて、相互作用を起点としながら結合よりも関係を社会本質として強調することは、自然相対主義

をとることとなり、この意味で、ベントリーとおなじく相対論の立場をとることとなる。

しかしながら、ウィーゼが「それにもかかわらず、われわれは、ベントリーの絶対的な相対性原理にはしたがうわけにゆかない。その根拠とは、人間的自我 (ego) についてのわれわれの見解にある。かような自我とは、上述したように、現象形態の相対性にかかわらず、われわれから見ると、人間の生活の認識の中心点なのである」⁽¹⁶⁾のべているのは、「個人も社会も、集団も本質的なものと考えない」⁽¹⁷⁾ベントリーとは大いにことなるのである。したがって、ベントリーの場合は完全な相対論者として、一つの「实在」や「精神」の存在を強調し、人間、社会、環境を一体のものとして扱ってゆこうとするもので、この立場は、あきらかに、直接観察の方法を用いるという特徴だけではなく、プラグマティズムの性格もしめしている。⁽¹⁸⁾

このように考えてゆくと、さきに述べたベントリーのトランスアクション・アプローチという方法は、ウィーゼの関係学との比較において明瞭にされた社会観察の方法、つまり主体の人間を強調する相互作用や関係論とことなる相対主義、「人間と社会における相対性」の延長として理解すれば、セルフアクションはいうまでもないが、ウィーゼが強調した相互作用や関係論とも、実質的に大いにことなることを理解することができよう。この意味では、認識論としてのトランスアクション・アプローチは、ベントリーにおいて、一九二六年『人と社会における相対性』(Relativity in Man and Society) の基調が、延長、拡大した形をとったものといふことができよう。

(1) Dewey and Bentley, *Op. cit.*, Preface, P. v-vi.

(2) *ibid.*, p. 69.

(3) もともと「ベントリーによって論述された第一章」論理学における曖昧性 (Vague in Logic) につづく第二章「術語の問題」は、大要つぎのように述べている。この場合の方法論的基礎をなしている「トランスアクション・アプローチ」は、

トランスアクションの概念

マックスウェル (J. C. Maxwell) の『物質と運動』(Matter and Motion, 1877) において、物質体系の系統的解釈がトランスアクションの概念を導入することによって、現代物理学の「場の理論」の方向へふみ出したとする。デュレイとベントリーの考察とも同じくものである。なおこのトランスアクションの作用を知識論の領域に適用したので、ここに大きい特徴がある。事象の持続過程 (durational Process) をあらわす最も一般的特徴が作用 (action) と名づけられ、前科学的立場からすれば、事象はそれら自身の力を持ち、自身の力で作用する自己作用 (self-action) となる。ニュートン力学以後の古典力学の立場からみれば、運動の第三法則である相互作用 (interaction) となる。そして現代物理学の「場の理論」の立場からすれば、トランスアクションな方法が用いられることとなる (pp. 68-9)。このトランスアクションは、「知識の全体系を通じておこなわれる機能的観察」であるとされ、第三章「公準」(Postulation) において、「知る」と知られるものは一つの間違った事象の局面として認められるべきである」という公準を導くこととなる。

- (4) タイキョーゼン著 三浦・石田訳『シモン・デュレイの生涯と思想』Chap. 15, Note 50, p. 75.
- (5) Dewey and Bentley, op. cit., p. 311.
- (6) *ibid.*, p. 73.
- (7) *ibid.*, p. 73.
- (8) *ibid.*, p. 72.
- (9) *ibid.*, p. 304.
- (10) *ibid.*, p. 296.
- (11) *ibid.*, p. 301.
- (12) *ibid.*, pp. 295-96.
- (13) *ibid.*, p. 304.
- (14) *ibid.*, p. 108.
- (15) L. v. Wiese, Allgemeine Soziologie, Teil II, Gebildelehre, 1929, S. 71.
- (16) Wiese, a. a. O., S. 71.
- (17) Wiese, a. a. O., S. 71.

(18) 上林良一「ベントリー社会学の立場——とくにウィーゼの関係学に対して——」法学論集、第三十二卷第三・四・五号、四三七一—三八頁参照、一九八二年十二月。

三 デューイとベントリーの共同研究

以上において、われわれは、自己作用 (selfaction)、相互作用 (interaction)、そしてとくにインタラクシオンとの区別、比較に重点をおいて、トランスアクションの機能と概念を、『知ることと知られるもの』を主要な手がかりとして理解することができた。いうまでもなく、デューイとベントリーの共同研究の成果として、共著『知ることと知られるもの』が発表され、その中心テーマとして、トランスアクションの機能が高く評価されたのであるが、ここでは、どのような研究の経過を経てトランスアクションの概念が形成されたのであろうか、の問題をとりあげよう。トランスアクションの概念と方法論、トランスアクション・アプローチが形成された過程は、両者の、いわゆる『哲学的文通』のなかで、手紙の形でおこなわれた両者の理論的応答の連続の過程から理解することができるであろう。⁽¹⁾ このような観点に立って、主として、S・ラトナー、J・アルトマン、J・ホイラー編、『ジョン・デューイとアーサー・F・ベントリー——哲学的文通、一九三二—一九五二』(John Dewey and Arthur F. Bentley, A Philosophical Correspondence, 1932-1951, 1964)を素材として、両者の共同研究の主要テーマとなったトランスアクションの概念形成への努力の跡づけを調べてみることにしよう。

『知ることと知られるもの』は、「確実な名称の探求」(A Search for Firm Names)と題された「序論」から始め、⁽²⁾「一年ほど前、知ること (knowing) と存在 (being) の研究において、確実に行っていることのできる

一組の主要語を確定しようとする試みという、ながく懸案になっていた作業にとりかかる時期が到来したと、われわれは決心した⁽²⁾と冒頭に述べられている。この「共同宣言」が書かれたのは、一九四四年であるから、主として「哲学雑誌」(The Journal of Philosophy)に一九四八年まで、約五年間の両者の論文が集大成された結果が、一九四九年の『知ることと知られるもの』の公刊となって実を結んだのである。もちろん、この共著の内容となった十二の論文は、二人が目的とした知識論、認識論の分野で、とくに哲学的考察、術語の確定、知ることと知られるもの間のトランスアクションな機能をあきらかにしたものであることは、強調するまでもなくよく認識されるところである。しかしながら、このような両者の共同研究の結果としてここに発表された論文のみではなく、この共同研究の結実の背景となった研究上の努力の長い道程が注目されなければならないであろう。デューイとベントリーの両者は、直接、一九四九年の『知ることと知られるもの』におさめられた論文の発表にかかわった一九四五年から一九五〇年まで、ほぼ五十通の手紙を交換し、いわゆる哲学的交信をおこなっている。重要なことはそればかりではなく、これらの交信をふくんで、一九三二年以後交換した文書は、約二千点にも達し、ラトナー、アルトマン、ホイラーの三人によって一九六四年に発表された「ジョン・デューイとアーサー・F・ベントリー——哲学的文通」は、これらをまとめて公刊されたものである。考えてみると、デューイとベントリーが、一九四九年に、それぞれ、九十歳と七十八歳になつて、『知ることと知られるもの』を発表した、そのこと自身も大きな貢献であったが、その背景に、一九三二年以来、約三十年におよぶ長い共同研究の過程があったことに注目するべきであろう。

ちなみに、さかのぼって考えれば、一九〇八年のベントリーの『政治過程論』のなかから、われわれは、つぎのように、明瞭なトランスアクション・アプローチの萌芽を見ることができよう。「われわれが研究対象としている社

会における政治的問題についていえば、決して、全体としての社会の集団利益というものを見出すことはできない。われわれはつねに、ある一定の集団の政治的利益や活動は、そして集団現象を除いていかなる政治現象も存在しない、政治的またはその他の集団にあらわれる人々の他の活動と対立しているのを見出すだろう。われわれが研究する政治生活の現象は、つねに、明確さはさまざまであっても、きわめて現実的に、それらが生起している社会を分裂させている。社会そのものは、それを構成している諸集団の複合体 (complex of the groups) 以外の何物でもな⁽³⁾」

また「物理的環境、たとえば合衆国人口をとりあげてみよう。政治的、社会的活動の研究にとって、それが人間活動の一部分であるということを除けば、重要性または意味をもつような人口の要素があるであらうか。いいかえれば、われわれが用いなければならないのは、たんなる環境そのものではなくて、環境とすべてのもの (environment and all) としてのみ記述される特殊な人間活動である。それこそ生の素材 (raw material) であ⁽⁴⁾」

なおベントリーが、一九二六年『人間と社会における相対性』(Relativity in Man and Society) とくに第十四章「クロス・セクショナル・アクティヴィティ」(Cross Sectional Activity) で、「これらクロス・セクショナル・アクティヴィティをできる限り慎重に分析し、明確にし、相互の連関を重視して叙述するならば、われわれは、真に現実の状況を包括的に理解することができるだろう」と述べている。⁽⁵⁾ここで、クロス・セクショナル・アクティヴィティの用語自身にトランスアクショナルな意味が大きいばかりでなく、このトランスアクショナル・アクティヴィティを社会、集団、集団活動を説明する要素として重視しているところに、ベントリーの方法論的特質が見出されよう。こうしたベントリーの考え方によって、完全な定義にしたがったトランスアクション、あるいはトランスアクション・アプローチではないとしても、実質的には、トランスアクショナルなアプローチを用いたものであることは明瞭

なことであろう。

つぎに、デューイの側においても、一九三八年の『論理学—探求の理論』(Logic-the Theory of Inquires)のなかで、のちにトランスアクションに発展したインタールアクションの機能が状況を説明する重要な要素とされているばかりでなく、インタールアクションの概念そのものにトランスアクションナルな意味をふくませていたと推察される⁽⁶⁾。

このようにみえてくると、トランスアクションをめぐるデューイとベントリーの共同研究の背景、相互の協力の道程は、非常に長くかつ深いものがあつたと推察することができよう。

- (1) 上林良一「ベントリーとデューイの連関—トランスアクションの形成」法学論集、第三十五卷第三・四・五号、一九八五年十二月、二七七一—八頁。
- (2) Dewey and Bentley, op. cit., Introduction, xi:.
- (3) Bentley, The Process of cloverment, 1908, p. 222.
- (4) *ibid.*, pp. 193-4.
- (5) Bentley, Relativity in Man and Society, 1926, p. 107.
- (6) 上林良一『ベントリーとデューイの連関—トランスアクションの形成—』法学論集、第三十五卷第三・四・五合併号、一九八五年十二月、二七四—七六頁参照。J. Dewey, Logic-the Theory of Inquiries, 1938, p. 106, p. 150 参照。

四 『哲学的文通』

ここでは、『ジョン・デューイとアーサー・ベントリー—哲学的文通』を中心として、両者の応酬を探るため、さしあたっては、一九四三年四月二日、ベントリーからデューイに送った手紙の内容と、それに対するデューイの返書(一九四三年六月二十五日)の討論に重点をおいて、トランスアクションの提案と発想、共同研究の位置づけを調

べてみることにしよう。

「私が考えますのに、われわれにとって必要とする主要なことは、正確な術語を確定することに着手するということである。つまり、誰でもが理解することのできる言葉のポイントを明確にすることなのである。「知識」(Knowledge) という言葉を例にとってみるならば、もし、われわれが、一つのグループ、貴方と私、そして他の多くの人々の間に同意ができたならば、一つの言葉について三つあるいは四つの異なった用法を見出すであろう。したがってそれをK-1とかK-2というように名づける。そして一つの用法、あるいは他の用法に論争者を落ちつかせるならば、それは一つの進歩であろう。しかしながら現在のところでは混沌そのものである。貴方の今度の論文のなかで、『論理学』で使用したのとおなじ意味で、状況(situation) という語を数多く使用している。しかし、それについても、おなじような困難がともなっている。人々は、それを有機体の環境として理解するだろう。〈situationのなかに〉、有機体に含めるようにあるものをとりあげ、その後で、彼等は、〈situation〉外に〈心的なもの〉(a mental)を持つことになるだろう。有機体に直接関係しているとしても、〈経験〉(experience) という言葉は、完全に間違いである。〈インターアクション〉相互作用という語は、行為にさきがけて設定されている二つのアクター(行為者)を想い起させる言葉である。〈状況〉(situation)は、貴方や私によってなされるように、この語の存在をうけいれる以前に、聞き手(hearer)の再現を必要としている。〈トランスアクション〉の語は、私には、一応はベストの用語であると思われる—貴方は、それを積極的に使用した唯一の人でありますが。

周知のように、パーズ(Peirce)は、明確に、自然的宇宙(Naturalistic Universe)を認識し、現象はすべて、継続的なものであると認めた。しかし、彼はその時代の言葉で事柄を説明しようとはしなかった。ジェームズ(James)

は、事実について、中心的核の認識をおこなったのであるが、それを使用することも、彼が事実と認めたことを誰にも認めさせる努力をしなかった。貴方は、すべての領域にわたって解明された（私は、これまで、トランスアクションを貴方の著書のなかで偶然に発見できないと言ったこともなく、また言うことも出来ないと思います）。しかし、貴方は、言葉どおりにいえば、気分的にそれをなし遂げられた—というのは、私は、正確で定着した言葉・事実を見出すことができないからである。私は直接的社会的密接性（個人的断片から広まってゆくのでなく、人々のなかに全般的に見られる事柄の原始的叙述）をつけ加えたということができよう。しかし、私は、正確で確実な言葉を使用しようとはしなかった。もしこの方法が進歩をもたらすとすれば、言語的に、ある一定不変の段階にまで到達するであろう。あるいは、そうでなくても、些少でも確実な位置づけがなされるだろう。⁽¹⁾」

以上が、一九四三年四月二日のペントリーからデュイーに送られた手紙の全文であるが、ここで、「知識」「認識論」の領域で、重要な示唆をおこなったことが理解されよう。すなわち、この手紙は、おそらく、哲学と社会科学における術語の混乱をずばりと指摘したうえで、知識論におけるデュイーの Situation についても、Experience についても、その不完全性、不適切を指摘しているので重要な論文である。なおそれ以上に、インターアクション、相互作用というものを批判し、「トランスアクション」を積極的に評価している点では、たんにわれわれは、トランスアクションの明瞭な提案を認めるばかりではなく、のちに、デュイーとペントリーの共著となった『知ることと知られるもの』（一九四九年）におさめられた論文の原型的発想や出発を認めることができる。とくに、インターアクションについて、「行為にさきがけて設定されている二つのアクター（行為者）を思い起させる言葉である」と述べていることこそ、両人が強調しているように、主体と客体の存在を認めず、環境を一体のものとし、一つのプロセスとして

全体を見ようとするとトランスアクションの立場からの批判であるといえよう。なおこの文章の終りに見られるように、デューイのトランスアクションナルな立場に賛意を表して、ベントリーがトランスアクションの用語と方法を主張しそれを宣言しながらも、デューイの態度を「気分的」であると批判してトランスアクションに確実な地位を与えようとしているところから、彼の非常な積極性と熱意が推察されよう。

これに応じて、つぎに述べるように、六月二十五日、デューイが返書を送り、そのなかで、ベントリーが言及した哲学上の正確な用語の確定についての共同研究の提案を宣言している。「私は、今年四月二日の貴方からのお手紙を再度読み返しておりました。貴方は、堅実で正確な言葉を使わずに、雰囲気的に私が書いている以上に正確な言葉を述べなかつた。ふり返ってみると、その当時、これ以外の方法がなかつたと思う。人々は、その雰囲気を呼吸して何ものかを得たはずである。しかし、いつまでも物事は上首尾に運ぶとはかぎらない。正に、多分重要な一組の術語を確定しようとするタイミングが到来したようである。今後私の方からつづけて書くということはできそうにありませんが、もし貴方の方で、はじめて下さるならば、言葉の問題について私が御協力することができると思います。貴方は、とくに〈知識〉について論じられました。したがって、多分、最初に着手するべきことは、現在の著作のなかで見られるさまざまの意味づけをリストすることであると思います。それからそれを何らかの方法で分類すること……というように進めましょう⁽²⁾」

以上はデューイの手紙の冒頭の一節であり、あとになおデューイからの重要な知識論、認識方法論の立場と主張がつづくのである。しかし、この四月二日の返書によって、とくに、いつまでも、雰囲氣的な術語の使用に満足しておれないので、「重要な術語のセットを確定しようとする時機が熟して来た。私から積極的につづけて書いて行くこと

はできないが、貴方から問題提出をして下さるならば、受けて立ちましょう」という意味のことを述べているから、われわれは、ベントリーとデューイが、知識論上の術語についての共同研究の出版を、この点からはじめたことを認識することができよう。

(1) S. Rauner, T. Alhman, J. E. Wheeler ed, J. Dewey and Arther F. Bentley-A Philosophical Correspondence 1932-1951. 1964, p. 137.

(2) *ibid.*, p. 137.

五 共同研究の背景

前章では、一九四三年以降のデューイとベントリーの間に関わされた手紙を調べることによって、直接的に、論理学、知識論、認識論の問題、ことにトランスアクションの概念についての共同研究の過程の一端を知ることができた。しかしながら、トランスアクションの概念の提案についていえば、必ずしも、個々の時点の手紙の内容だけで、これに関する両者の思考を明瞭に跡づけることはできない。また交換された手紙の全般にあたってなお詳細な考察が必要であり、なお、これまでのデューイとベントリーの著作の内容にも、遡って検討しなければならぬであろう。というのは、デューイとベントリーが一九四三年の時点で、トランスアクションの概念その他の問題について共同研究をはじめたことは、決して唐突なできごとではないと考えられ、両者の背後にある思想や立場に、ふかい親近性や類縁性を認めることができよう。第一に、デューイからは見知られることができなかつたが、ベントリーは、一八五五年、シカゴ大学のデューイの演習に出席し、のちにトランスアクションの概念に結実するような科学的認識論の萌芽

となったほどの大きい示唆を与えられたこと、第二に、デューイとベントリーは、共通した正義感と思想的立場にもとづき、ラ・フォレットを推した選挙運動にあらわれるような第三党的主張と社会的政治的実践活動を通じて、現実的貢献を果したこと、第三に、デューイとベントリーは、それぞれ哲学と政治学という形式的でせまい研究領域に限局されないで、いづれもプラグマティズム哲学を基調として、政治学、哲学、論理学、認識論、教育学等の研究分野にその対象を拡大し、広汎な学問的視野に立っていたことがあげられる。

ここでは、哲学者デューイと政治学者ベントリーの研究史における長い思想的交流や関連というよりも、科学論、知識論、認識論の分野、とくに共著『知ることと知られるもの』のなかで、トランスアクションナル・アプローチの発想と発展をめぐる両者の関連をとりあげてみよう。

「時間的経過をもって事柄を観察するような方法は、パースによって継続的に使用されて来た。彼はこの方法を発展させるような好機に恵まれなかったのである。この方法は、彼の初期の論文の一つで、すべての思想というものは、時間の記号 (sign) であらわされ、時間を必要とすると強調して以来、彼にとって基本的なものとなった。ウィリアム・ジェームズ (William James) のいわゆる「直接的」または「中立的」経験とは、明瞭に、知識論の分野におけるかような形の直接観察の努力であった。インターアクションとトランスアクションの概念の使用についての、そして主観的でも客観的でもない組織体の一つの方法あるいはシステムとして経験を提示したデューイの発展は、こうした考え方を強く打ち出したものである。なお彼の心理学的研究は、この方法にしたがった際立った貢献を果した。一九〇三年と一九一六年の論理学の論文につづいて、著書『論理学―探求の理論』(一九三八年)において、彼は、状況的背景 (situational setting) のもとに探求の過程を發展させた。ベントリーの一九〇八年の『政治過程論』は、わ

れわれが、今日(トランスアクション)とよぶアプローチの方法で政治的叙述を發展させた。彼が後年果した言葉としての数学的分析、行動の状況的取扱い、行動的な空間と時間の事実的發展は、すべて、この研究方法に属するものである⁽²⁾。以上は、『知ることと知られるもの』、第二節「用語の問題」のなかで、「事柄(event)は、持続的(durational)な幅をもつ」ことと、「物事に対処して行動する人間自身」(man-himself-in action-dealing-with things)という人間観を強調したのち、トランスアクションの概念に言及した一節である。ここで注目したいことは、デュローイが、おなじプラグマティズム哲学者として、バースやシェームズの思想に持続(duration)の要素を認めていることは当然であるとしても、それ以上、もともとは哲学・論理学・認識論の領域での専攻学者ではないペントリーの、『政治過程論』(一九〇八年)に用いられた方法論が、持続の要素にかぎらず正統なトランスアクションナル・アプローチの原型を示しているとして、高く評価されていることである。おなじように、第四章「インターアクションとトランスアクション」において、両者の区別に関する「注記」でつぎのように述べている。すなわち「(トランスアクション)とは、ふつうの説明では、二つの、あるいはそれ以上のアクター(行為者)によってなされる交渉から独立したものという思考について使用される。こうした言葉のうえの短絡は、実際上は、ほとんど何の支障もなく、それはそれだけの事である。研究のうえで、事柄について適切なりポートをすることが必要であり、そのためには、なおさら適切な行動的な説明が保証されなければならないのである。デュローイが、はじめて(トランスアクション)の語を使用したのは、(インターアクション)の語によってなされたよりも、明確にシステムを強調するためであった。この態度の初めは、彼の論文「心理学における反射弧の概念」(The Reflex Arc Concept in Psychology, 1896)に見出される。ペントリーの政治的事象の取扱いは、彼の著書『政治過程論』において、トランスアクションナルなタ

イブのものであった。もちろん、ここではトランスアクションナルという名称が使用されていたわけではない⁽³⁾。インターアクションとトランスアクションを区別して定義することを目的とした第四章「インターアクションとトランスアクション」は、もともとデュイイとベントリーの両者の署名のもとに書かれたものであるが、ベントリー自身いうまでもないが、デュイイが、はやくからベントリーの著書『政治過程論』の方法論に、トランスアクションナルな発展の芽生えを認め、敬意をもって注目していただろうと推察されよう。

なお、ここに述べた点については、S・ラトナーが、J・アルトマン、J・ホイラーとともに共編した『ジョン・デュイイとアーサー・F・ベントリー——哲学的文通、一九三二—五二』の序文で、つぎのように述べていることも、ベントリーの『政治過程論』のトランスアクションナル・アプローチを具体的に説明した言葉として、傾聴に値するものであろう。すなわち「個人と集団へのヘトランスアクションナル・アプローチ、ベントリーとデュイイは、四十年後、彼等の共著『知ることと知られるもの』のなかで、(ヘトランスアクション)の語を使用し、かつ発展させた。しかし、彼等の立場の基本的要素は、『政治過程論』のなかに見出されるべきである。第一例は、人間活動の局面としての物理的社会的環境を考慮に入れるベントリーの説明の仕方である(一九三—九六頁)。他の一つの例は、主観と客観的、心と物、欲求と欲求する人間、人間の外部的行為と制度あるいは人間によってなされたこととの区別は、過程のさまざまな局面として、最上のもののように使われる非常にあらうばい説明にすぎないという彼の証明である。おなじように、彼は、政策形成・発明と発見への意識的と無意識的、個人的と社会的貢献という区別を最少限に評価した(一九六—九七頁)⁽⁴⁾」。

なお、P・オデガートが『政治過程論』の序文で引用しているように、一九五三年九月の講演会で、ベントリー自

身が、「私の初期の研究とその後の研究の間には何の分裂もありません。私は人間行動の研究の大切なことを知りました。……政治という研究対象は、さし当っての私の叙述と解釈の所在地であった。」と述べているのは、八十歳を超えて研究の全生涯を回顧した意義ふかい言葉であるが、同時に、プラグマティストとして人間行動の研究という対象の一貫性をあげているばかりではなく、上述のような基本的方法論の継続性を強調しているものとして読みとることができよう。

- (1) 上林良一「メントリーとデュイの連関―トランスアクション形成―」法学論集、第三十五卷第三・四・五号、一九八五年十二月。二五六―六二頁。
- (2) Bentley, op. cit., pp. 52-3.
- (3) *Ibid.*, pp. 116-7.
なお、J・R・コムンズ (Commons) と J・H・ミード (Mead) の方法にふれて、つぎのように述べている。すなわち「J・R・コムンズは、彼の著書『資本主義の法的基礎』(一九二四年)のなかで、物的な財物や人間感情よりも、結社について機能する法則に注意がむけられた、そうしたタイプの経済的探求を説明するのにはまる言葉を使用した。H・G・ミードのいわゆる〈状況〉(situation) というのは、彼の展開が、トランスアクションナルよりも、しばしばインターアクションナルではあるが、トランスアクションナルな形式で示されている」p. 117.
- (4) S. Ratner, op. cit., p. 31.
上林良一「メントリーの集団理論の方法論―トランスアクションナル・アプローチの発展―」法学論集、第三十四卷第三・四・五号、一九八四年十二月。第三節参照。
- (5) Bentley, The Process of Government, 1967, Introduction, p. xiii.